

ゾーブを連ねて火山観測所、鬼押出観測点を案内し、2時間後には我々も米軍用機(6人乗)2台に分乗、パスール等と共に南軽井沢発、50分後には月島の飛行場に到着した。この間さしも話好きのパスールも、もつぱら聴き手に廻る程説得につとめたのであつた。兎に角浅間での現地会談では極めて友好的にこの真剣な問題が話合われ、自分の立場を主張すると同時に互に相手の立場をも又より深く理解し合うことができたことは誠に幸であつた。それかあらぬか帰京数日後全く思いがけない方面から、米側の1人は浅間山には東大の施設があるので演習地に使うことは極めて困難となつたと語つたということを引き及んだのであつた。

8. 日米専門家協議会

浅間問題もいよいよ最後のコースに達した。6月15日協議会は予定通り開会された。出席者は東大側茅理学部長(総長代理として)、那須震研所長、坪井(忠)、河角教授、表助教授、佐久間助手、外事係長守屋女史(通訳)、文部省岡野学術課長、立松事務官、米側パスール大佐、リンク中佐、マレー中佐、フォスター博士、リビングストン技術顧問、他に通訳1名及び司会者の外務省関係官等であつた。会談は朝から夕方までつづけられ6月3日に提出した文書、特に立合実験の報告に対する説明を求められたのに始まり、測定器の性能に関する質問で一日が暮れ結論を得るに至らなかつた。次回17日第3回19日、第4回20日、第5回7月1日、と会談が行われた。この間米側は条件も縮少し又交換条件として役立つならと特殊な援助を申し出たりしたけれども、自然現象の観測の問題は、いわゆる外交交渉の互諒精神を發揮できる事柄と範疇を異にする所があるので、我々としても協力の精神において米側に劣るものではないけれども、安易な妥協をすることはできなかつたのも又止むを得なかつたと考えている。この会談は実に5回、徹にいきり細を極めてあらゆる可能性について論議が尽され、なかなかむつかしい話も出たのであつたが、会談の空気は終始和やかで多くのエピソードが生れた。リンクは地震の観測に対して、又その用いる地震計等に対して、又実験報告の記載事項に対して勉強したことは実に驚くばかりであり、彼のなかなかするどい質問に対して東京大学より地震学博士の学位を進呈しようとの冗談が飛び出し、パスールがリンクの肩をたたくき握手をして「お目でとう」という場面もあつたりして友好的空気に充ちたものであつた。この会談がこのように友好的に終始し、しかも充分大学側の主張の意を尽し得た功績の大半は通訳の役を引きうけられた守屋女史に帰せらるべきであらう。「日本側の発言をよく整理した上それを立派な英語に直すものだから、我々自身でさえ英語に直つた我々の主張をきいた方が頭が整理される位であつた」と坪井先生が東京新聞に寄稿されているのを見てもその一斑を知り得るであらう。

9. 決定

このようにしてこの会談は双方合意の結論に達するこ

とはできないまま中止となつたが、我々としても専門家協議会で議論すべきことはしつとされ、今日日米合同委員会が決定を下すべき段階であることを感ずるようになった。はたして7月11日井関局長談として外務省としては浅間山は使用しない意向であるということが表明せられ、7月16日に下記のような日米合同委員会の正式決定が行われて、3月始めからもみにもんだ問題に休止符が打たれたのであつた。

外務省発表 (昭和28年7月16日)

去る三月米軍より山岳訓練用地として提供方要望された浅間山の一部地域については東大地震研究所による地震研究に支障を及ぼすかどうかという点が決定的な問題となつたので、去る5月14日日米関係者による実地試験を行い、これに基き前回に亘り日米専門家会議を行い慎重、且徹底的に検討を遂げた結果、米軍の要望する最少限度の訓練も地震研究に支障を及ぼすことが確実となつたので今日の日米合同委員会において右地区を使用しないことに決定を見た。

なお、本研究は日本のみならず世界的に重要な研究を行うものであり、これに対する支障を極力減少するため、今後は一般登山客に対しても関係機関により適宜制限措置がとられる趣である。

去る8月9日地震研究所の浅間支所開設20周年記念午餐会が軽井沢千ヶ滝グリーンホテルで催されたとき、矢内原総長はテーブルスピーチの中で次のような主旨のことを話された。今回の浅間山の問題については、私はいはば将棋の駒の使い方がうまかつたという点をいささか自慢したいと思つている。震研の那須所長始め教授助教の方が一生涯懸命なさるのほもちろんとして理学部長の茅教授には私の代理として会談に出席していただくことをお願いし、又地球物理の坪井教授にも特にお願いして会談に出ていただいた。更に外事係の守屋を通訳としてつけたこともなかなか上手な駒の用い方だつたと思つている。と。確かにその通りであつて東大がその交渉の最初から掛値なしの最少限の要求を打出して誠心誠意一貫して変ることなく、遂に目的を達することができたのは総長の思想が夫々の駒の背骨の支えとなつていたことに負うところが多かつたといつてよいであらう。

(1953.9.10)

正誤表 9月号(第5巻第9号)

頁	段	行	種別	正	誤
1	右	7	本文	電磁スイッチ	電気スイッチ
"	"	9	"	(5章参照)	(6章参照)
"	"		第1図	銻先	銻
"	"		"	ガラナット	ガラナツ
4	左	15	本文	電気銻の	電気銻
5	"		第10図	(天地逆)	
"	右	5	本文	毎秒数千駒	毎秒約数千駒
21	"	15	"	601	6.01